

河内長野市南部にある旅館「あまみ温泉 南天苑」の女将として、日本の伝統である旅館の灯を守るため、府内の女将仲間3人とともに奮闘を続けている。

昭和63年から南天苑で働き始め、平成6年に女将となった。宿の母屋は日本を代表する建築家・辰野金吾（1854～1919年）が設計し、大正2年に建築された純和風で、築100年以上の歴史を誇る。今でこそ、隠れた人気スポットとして、大勢の外国人旅行者にまで知られるようになったが、その道のりは決して平坦なものではなかった。

女将として20年以上、切り盛りする中で直面したのは、旅館の減少という危機だ。平成5年に府内で13558軒あった旅館は24年には808軒にまで激減。迫り来る荒波を前に、旅館を守るためにはどうすればいいか、考えあぐねていた。

「あまみ温泉 南天苑」女将

山崎友起子さん＝河内長野市

転機が訪れたのは24年秋。偶然、フェイスブックを通じて府内の女将らとのつながりが生まれた。集まったのは「大和屋本店」（大阪市中央区）の石橋利栄さん（54）、「不死王閣」（池田市）の岡本尚子さん（58）、「犬鳴山温泉 不動口館」（泉佐野市）の河原千晶さん（52）の3人。抱える悩みも危機感も共通し

ていだけに、すぐに意気投合した。旅館の将来を盛り上げようと25年初め、4人で「大阪女将会」を結成。対策について語り合ったが、後継者不足だけが原因ではなく、宿の魅力を発信できていないため、宿泊客の選択肢から外されていることに気付いた。もっと積極的にPRしようと、手始めに26年2月、河内

ワインや泉州タマネギなど、各旅館の地元特産品を使った「和」にこだわった演出が、多くの外国人観光客を魅了。インバウンド（訪日外国人客）の急増という追い風も受けて、外国人だけでも26年に約2160人だった宿泊客数は、27年には約2.5倍の約5350人に増えた。

その経験を生かし、山崎さんは今年、女将会メンバーの協力を受けながら、外国人観光客に対応するための業者向け英会話マニュアル動画を制作した。

旅館の灯守り続ける

も並ぶ富田林産のエビイモなど、四季折々の食材で客をもてなす。名建築家に

（藤崎真生）



やまゆき・ゆき 昭和34年、河内長野市生まれ。短大卒業後、同市役所に採用。現在の「南天苑」社長、一弘さん（56）と結婚し、出産を機に退職。その後、旅館で働き始め、平成6年に女将に。25年初め、府内の別の旅館の女将3人とともに「大阪女将会」を結成。日本の伝統を守るため、力を合わせて旅館の魅力を発信し続けている。